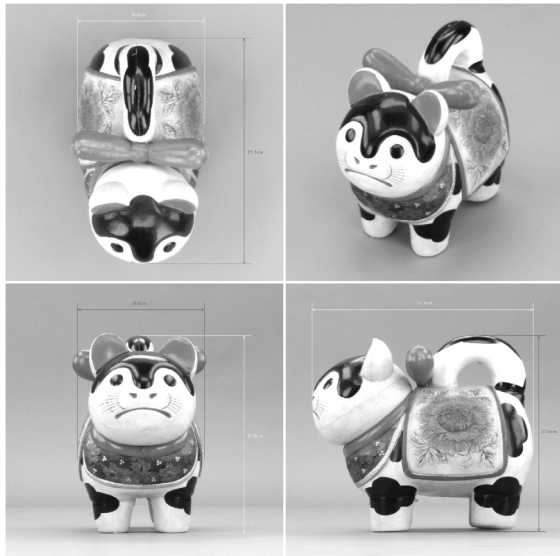


国立民族学博物館の収蔵品 ②6

標本資料の四面画像



第5代目の標本画像自動処理装置。
2007年3月、垂水万範撮影



標本画像自動処理装置で撮影した犬張子（標本番号：H0026833）。この資料は、アチック・ミュージアムを主催した澁澤敬三により、1959年10月、当時の日本民族学協会附属民族学博物館へ寄贈された中の1点。2007年3月23日、溝尻梢撮影

民博が公開している「標本資料目録」データベースには、民博所蔵のもの資料の大部分が収録されている。資料の文字による基本情報に加えて、多くは資料の写真（画像）が付随している。このデータベースを眺めていると、画像は正面・右側面・平面・ななめ右上の四つの方向から一律の形式に則って撮影したものが少なくないことに気づく。民博では一九八四年から約二五年にわたって、おもにこの形式で所蔵資料の画像撮影を行ってきた。現在、データベースに画像付きで掲載されている資料のうち、約五六％がこの四面画像である。当時この形式を採用した理由は、従来博物館では、ものの形状の記録に複数の方向から見た実測図が作成されてきたこと、建築や工作物などの設計では立体物を三面図で表現すること、当時のCTなど立体情報を記録する技術は、さまざまな大きさや素材でできた大量の所蔵資料を記録するには実用的でなかったこと、などであったと聞いている。そして資料の四面画像を撮影するために「標本画像自動処理装置」という専用の装置を設計し導入した。

データとして蓄積した。同時に、撮影した画像から資料の幅・奥行き・高さの寸法を非接触で計測した。四度の更新を経て活躍したこの装置も、二〇〇八年四月の撮影を最後に退役することになる。画質のよい画像が撮れる安価なデジタルカメラが出てきたことや、この装置では撮影アングルやライティングの微調整ができず、「展示図録に載せる写真としては不十分なこと、維持費の問題などがその理由であった。現在なら、三次元形状の計測や全周画像を撮影して、資料の形状や質感をどの方向から見てもよりリアルに再現できる技術が数多くある。しかし、三〇万点を超える民博の所蔵資料を撮影しなおすためには、相当の手間と時間が必要である。資料を収蔵庫から撮影場へ取り出し、撮影のあと元に戻す作業量も無視できない。画像のない資料もまだ数万件残っている。

いつか見た、競売会社サザービーズのオークション風景のテレビニュースでは、オークションにかかる画像の前後左右上面の写真が提示されていた。民博の四面画像はもはや時代遅れで、画質はスマホのカメラにも劣る。しかし、資料の立体的な形状を把握するには、高画質の図録写真一枚に勝る情報になりうるといえる。（山本泰則）